明治学院大学『国際学研究』第 58 号, 31－43, 2021 年 3 月

【研究ノート】

沖野岩三郎文庫の安重根絵葉書

秋　月　　望

はじめに
沖野文庫の書簡類
幸徳秋水の漢詩とキャプション
岡繁樹と絵葉書見本
絵葉書見本の写真
安重根の写真絵葉書
絵葉書見本の製作
沖野岩三郎による保管
おわりに

はじめに

明治学院大学図書館の沖野岩三郎文庫に，ハルビン駅頭で伊藤博文を暗殺した安重根の絵葉書が所蔵されている。切断した左手の薬指を見せるポーズの写真の上部に漢詩が書き込まれ，下部に英文キャプションが印刷された絵葉書である。1967 年に刊行された書物[(1)]で初めて紹介され，その後韓国や日本の論文やシンポジウムでも取り上げられており[(2)]，韓国のテレビ局も何度か取材してドキュメンタリーの中で放映している[(3)]。しかし，この絵葉書の由来については詳細な検討はなされておらず，特にテレビ放映の中には根拠のない推論も見られる。

本稿では，この絵葉書について，この絵葉書が作成されるに至る過程と沖野岩三郎の手許に残されていた経緯について，関係資料を提示しつつ検証する。

沖野文庫の書簡類

沖野岩三郎は，1876 年和歌山県日高郡寒川村に生まれた。役場の書記や山林労働者などを経て，1890 年に和歌山師範学校に入学，卒業後は小学校教員となり寒川小学校の校長を務めた。1901 年に受洗してクリスチャンとなり，1904 年に上京して 9 月に明治学院神学部に入学した。明治学院在学中，同期入学の賀川豊彦らと日露戦争に反対して非戦論を主張した。1907 年の卒業と同時に，和歌山県の日本基督教会新宮教会牧師となり，新宮在住の医師で社会運動家の大石誠之助らと親交を結んだ。1910 年の大逆事件に巻き込まれるが，沖野は危ういところで逮捕を免れた。1917 年に大逆事件をテーマに執筆した小説「宿命」が『大阪朝日新聞』の懸賞小説に入選し，以後文筆活動に入り，小説，童話，評論，随筆，紀行など数多くの作品を発表した[(4)]。

沖野は，戦後 1952 年に，蔵書 28 箱，自著 4 箱と原稿・書簡などを含む資料を明治学院に寄贈した。このうち，一般書籍類は大学図書館の蔵書として閲覧に供されたが，8 つの巻物に表装された書簡類は特別貴重資料として貴重書庫に保管されている。この書簡類については，1969 年 1 月に図書館内で「沖野岩三郎寄贈書簡内容紹介」が作成され，1982 年 11 月に明治学院大学図書館から刊行された『沖野岩三郎文庫目録』にそれが再録されている[(5)]。

書簡・葉書などを表装した 8 巻の巻物は，それぞれに 1～8 の巻数が記されており，第 6 巻と第 8 巻には表に「一九一〇年事件」と記載されている。このうち，第 6 巻には，沖野岩三郎・ハル夫妻が

図 1

発行していた雑誌『サンセット』の発行や発禁に関わる書類，大逆事件の裁判に関連した控訴申立書や，弁護士平出修からの書簡，崎久保誓一，大石誠之助からの書簡，葉書などが表装されている。第 8 巻は，崎久保誓一，大石誠之助から沖野岩三郎にあてた獄中書簡が中心である。

第 6 巻は，幅 25cm，全長 1670cm で，その 1040cm あたりに，幸徳秋水の漢詩が書かれ，英文キャプションの入った絵葉書が貼り込まれている（**図 1**）。この右側には，崎久保誓一が 1929 年から 1930 年にかけて沖野岩三郎に送った 6 枚の葉書が貼られている。

崎久保誓一は，1911 年 1 月 18 日に大逆罪で死刑判決を受けたが，翌日の天皇特赦で無期懲役に減刑され，秋田刑務所で服役して，1929 年に仮釈放された。巻物のこの部分の 6 枚の葉書は，仮釈放後に崎久保から沖野に送られたもので，葉書の表裏を剥離して両面を並べて表装してある。この葉書の並びに貼られている安重根の絵葉書は，写真面のみが表装されている。

絵葉書の後ろ（左側）には，「東京牛込富久町 113 大石誠之助」から「紀伊國新宮町キリスト教会沖野岩三郎」宛に送られた封筒と 1911 年 1 月 6 日付の「獄中にて聖書を読んだ感想」という書簡が貼られている。東京牛込富久町 113 は東京監獄の住所で，ここに収監されていた大石誠之助は，1 月 24 日に幸徳秋水らと共に処刑された。大石誠之助から沖野岩三郎へ送られた最後の手紙，1 月 20 日付書簡は，第 8 巻の最後に表装されている。

この第 6 巻の安重根の絵葉書については，「沖野岩三郎寄贈書簡内容紹介」では，「安重根をたたえる幸徳秋水の詩（本の切り抜き）」となっているが，

安重根の絵葉書

図 2

「本の切り抜き」とあるのは誤りである。

この「内容紹介」が作成された 1969 年より前の 1964～66 年頃に，大逆事件の資料調査のために沖野岩三郎文庫を調べた神崎清がこの絵葉書を「発見」し，1967 年に刊行した神崎清『この暗黒裁判（革命伝説 3)』(芳賀書店 1967）に絵葉書の画像を掲載していた（**図 2**)。撮影条件が悪かったためか，非常に画質の悪いものだが，写真右下に「47」との鉛筆の書き込み[6] が写っており，沖野岩三郎文庫の写真と同一のものであることが確認できる。

幸徳秋水の漢詩とキャプション

1910 年 6 月 1 日，幸徳秋水が湯河原で逮捕された時，幸徳秋水はカバンに安重根の絵葉書を所持していたことが判っている。

大逆事件の裁判にあたっては，大審院の書記が手書きで被告たちの押収物についての一覧リストを作成した。大逆事件は秘密裁判だったため，この押収物リストも厳しく管理され，担当の弁護士には公判終了後の返却を条件に謄本が貸与されていた。弁護士平出修は，その一部の複写物を作り，新宮で被告家族の支援などにあたっていた沖野岩三郎にも送っていたという[7]。戦後，神崎清が，担当検事のところに残っていたその押収物リストを入手して，これに索引を付けて影印刊行したのが大逆事件記録刊行会『証拠物写』(1964) である。

その押収物リストに記載されている幸徳秋水の逮捕時の所持品の中に「絵葉書 安重根ノ肖像」とある。画像部分は省略されているが，漢詩と英文キャプションの文字部分だけが筆写されていた（**図 3**)。

神崎清は，明治学院大学の沖野岩三郎文庫の巻物の第 6 巻の中から，『証拠物写』に筆写されていたものと同じ漢詩と英文キャプションの絵葉書を見つけた。これによって，沖野岩三郎文庫の巻物に貼られているものが，幸徳秋水が逮捕時に押収された絵葉書と同種のものと判断したのである。

漢詩はこのように書かれている。

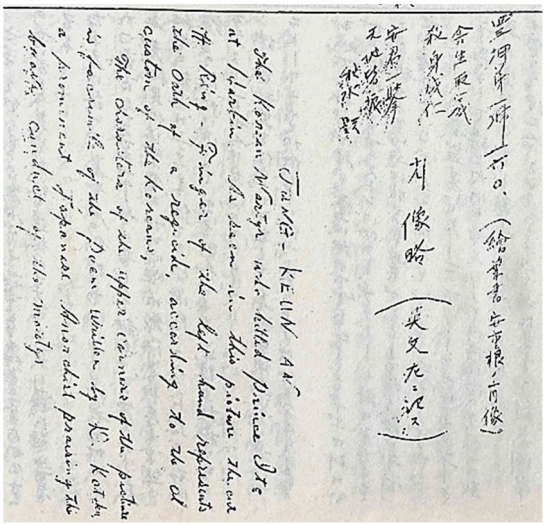

図 3　大逆事件記録第 2 巻『証拠物写』p.208

舍生取義　殺身成仁
安君一挙　天地皆振
秋水題

生を捨て義を取り、身を殺して仁をなす、安君の一挙、天地みな震う

写真の下部の英文のキャプションはこのように書かれている。

JUNG-KEUN AN

The Korean Martyr who killed Prince Ito at Harbin. As seen in this picture, the cut off Ring-Finger of the left hand represents the oath of a regicide, according to the old custom of the Koreans.

The characters of the upper corners of the picture is facsimile of the Poem written by D. KOTOKU, a prominent Japanese Anarchist, praising the brave conduct of the martyr.

安重根
ハルビンで伊藤公爵を暗殺した朝鮮の殉教者である。この写真に見られるように，朝鮮の古い習慣によって切断された左手の薬指は，弑逆の宣誓をあら

わしている。

写真の上部に記された文字は，卓越した日本の無政府主義者・幸徳伝次郎が書いた漢詩の複写で，殉教者の勇敢な行動を賞賛している。[8]

神崎清は，この絵葉書について，画像を掲載した著書『この暗黒裁判』には，「明治 42 年 10 月 26 日，ハルビン駅頭で韓国統監伊藤博文をピストルで暗殺した朝鮮人革命家安重根の写真で，サンフランシスコ平民社の岡繁樹の作った絵葉書に，「秋水題」という署名入りの漢詩が印刷してあった」[9] と記した。

しかし，神崎清が著書で紹介した後に出された明治学院発行の「沖野岩三郎寄贈書簡内容紹介」には，この記述内容は反映されず「本の切り抜き」としている。神崎清の情報が明治学院大学図書館に伝わっていなかったか，神崎清の著書の記載を見落としたのであろう。

岡繁樹と絵葉書見本

神崎清は，上述のように，この英文を入れて印刷したのは，岡繁樹だとしているが，その根拠は示されていない。

岡繁樹は，1878 年に高知県安芸市に生まれた。17 歳で上京して夜学に通って陸軍士官学校を受験したが失敗。1899 年に万朝報に入社して記者となった。ここで幸徳秋水，堺利彦，木下尚江などと知り合ったが，主筆の松井柏軒を殴って退職せざるを得なくなり，幸徳秋水や堺利彦の世話でアメリカに渡った[10]。1902 年 3 月 15 日に横浜を出て，サンフランシスコに着いたのが 4 月 3 日。それ以後，サンフランシスコで金門印刷所を経営しながら，サンフランシスコ平民社で活動していた[11]。

1905 年に筆禍事件で禁錮 5 ヶ月の刑を受けた幸徳秋水は，刑期を終えて出獄すると，11 月 14 日に横浜から伊予丸に乗船してサンフランシスコに渡った。サンフランシスコでは同行した甥の幸徳幸衛ともども岡繁樹の世話になった（**図 4**）。ところが，翌年 4 月 18 日にサンフランシスコ大地震が起きた。そのため，幸徳秋水は 6 月 5 日に香港丸に乗船して 23 日に横浜に戻らざるを得なくなった。しかし，甥の幸徳幸衛は絵の勉強をするために帰国せずそのままサンフランシスコに残った[12]。こうした関係で，幸徳秋水は，帰国後もサンフランシスコの岡繁樹との間で書簡や葉書でやり取りをしていた。

そのやり取りの中で，1910 年 5 月後半に，岡繁樹から幸徳秋水宛に安重根の絵葉書の見本が送られていた。この事実は，上述の『証拠物写』の中の押収記録に残されている書簡によって確認できる。幸徳秋水が大石誠之助に宛てて送ったこの書簡は，大石誠之助が新宮で逮捕された際に押収されたもので，この書簡の末尾に，サンフランシス

図 4　中央はアナーキストのアルバート・ジョンソン。
彼の左隣が幸徳秋水。写真の右端から二人目が岡繁樹か。

コの同志が作った絵葉書の「見本」を同封すると幸徳秋水が書いている。

> 封入の絵葉書は桑港の同志が作って見本をよこした外に、バクニンとクラボトキンのも出来ている、安重根のは日本製のは発売禁止になったから、是も直ぐやられるだろう。

幸徳秋水が湯河原で逮捕されたのは 1910 年 6 月 1 日であった。和歌山の新宮では 6 月 3 日早朝から幸徳秋水の関係者の住居が家宅捜索された。この時点では幸徳秋水らの逮捕はまだ報じられておらず，翌 4 日になって『大阪毎日新聞』に幸徳秋水逮捕の記事が載った。そして，6 月 5 日に大石誠之助が逮捕された。沖野岩三郎も 3 日に家宅捜索を受けており，検事による事情聴取もあったが逮捕はされなかった。その後，6 月末から 7 月にかけて，成石平四郎，崎久保誓一，高木顕明，峯尾節堂らが次々と逮捕された。しかし，沖野岩三郎だけは最後まで逮捕されなかった。

沖野岩三郎は，後日書いた「いたづら書き」[13]に，この前後の状況について書き残している。「いたづら書き」は，ロシアを舞台にして登場人物も全てロシア名で書かれた創作戯曲になっているが，実際には 1910 年 6 月の新宮での状況を描写したものである。

> 夫れは千九百十年の六月三日の朝であった。彼はまだ、ぐうぐうと寝て居る所を敲き起されたので、出て行つて見ると、
> 『M町裁判所検事ユリー・スワロシツチユ』といふ大きな名刺を突付けられて、同行の警官十數名の爲に彼の家庭は隅から隅まで捜査された。天井裏から床下まで檢べられた。けれども彼には夫れが何の爲の家宅捜査であるかといふ事が些とも知れなかった。
> 家庭捜査が濟んだ後、彼はＳ町の警察署の一室に檢束されて、日の暮々に警察署の樓上でユリー・スワロシツチユに思想上の質問をせられただけで放還された。其日は此の町内で、彼の友人十何名が一齊に家宅捜査を受けたので、町内はまるで蜂の巣を突付いたやうな騒ぎであった。
> 彼は夫れが何の爲の家宅捜査だったか、全然判らなかったが、翌日の新聞を見て初めて夫れが、ペテルブルグで、ドミトリーの一派が、澤山の爆弾を製造して、冬宮を襲はうとした事件に關連してゐるのだといふ事が知れた。そしてドミトリーは其月の一日に郊外の同志の家で捕縛されたのであつた。

沖野岩三郎は大逆事件での逮捕を免れたが，これについて沖野岩三郎自身は，東京旅行から戻った大石誠之助が 1909 年 1 月に新宮で開いた新年会に出席しなかったためであろうと推測している[14]。成石平四郎，崎久保誓一，高木顕明，峯尾節堂が参加したこの新年会に，「沖野は酒を飲まないから呼ばないでおこう」という大石誠之助の一言で，沖野岩三郎には誘いが掛からなかった。捜査当局の筋立てでは，この新年会で大逆事件の謀議が行われたということになっていたため，沖野岩三郎は逮捕を免れたというのである。大石誠之助と成石平四郎は刑死，特赦で無期刑になった高木顕明と峯尾節堂は獄死，崎久保誓一だけが 18 年後に仮釈放で生還できた。沖野岩三郎は，裁判中は地元の新宮にとどまって被告家族などの救援・支援活動にあたった。

6 月 5 日に逮捕された大石誠之助が押収された幸徳秋水からの書簡に「桑港の同志」とあるのは岡繁樹のことである。

すなわち，幸徳秋水が 6 月 1 日の逮捕時に所持していた安重根の絵葉書は，サンフランシスコで岡繁樹が作成して「見本」として幸徳秋水に送ってきたものであり，そのうちの一枚を幸徳秋水は大石誠之助に送ったのである。

上述のように神崎清が沖野文庫にある安重根の絵葉書について，「岡繁樹が英文を入れて印刷したもの」と断定したのは，この 5 月 26 日付の書簡が根拠なのであろう。しかし，大石誠之助の押収物リストの中には，同封されていたはずの絵葉書見本は記載がない。他方，その絵葉書と同じものが，沖野岩三郎の保管していた資料の中に残って今日まで伝えられているのである。その点については，神崎清は言及していない。

図 5

図 6

絵葉書見本の写真

この岡繁樹が製作した絵葉書見本の由来について考えてみたい。

この絵葉書見本で使われている写真は，1909 年 11 月 28 日の『大阪毎日新聞』に「兇漢安重根の無名指」として掲載された写真と同じものである。

『大阪毎日新聞』紙面の画像の右側にはこのような解説が挿入されている。

> 兇漢安重根の寫眞は曩に本紙に掲げしが今茲に掲ぐる寫眞は其筋に於て秘密に附し未だ世に發表されざるものにして左手の無名指が切斷されあるを特徴とす

伊藤博文暗殺時に安重根が薬指（無名指）を切断していたことは，拘束された早い段階から日本の新聞で報じられていた。1909 年 11 月 4 日付『東京朝日新聞』の「安應七の素性　二日京城特派員發」の記事では，

> 昨春之等一味の徒黨（四人とも云ひ十人とも云ふ）が伊藤公を殺害せんと謀り其決心を誓はん爲め左手の無名指を切落したる事あり今回の犯人安重根も矢張り左手無名指を切落せり

と伝えている。『大阪毎日新聞』は，これより先，1909 年 11 月 10 日にすでに安重根の写真を紙面に掲載していた（**図 6**）が，これはハルビンの日本領事館で撮った後ろ手に拘束された腰縄姿の安重根の写真をトリミングしたもので，切断された指は写っていない。11 月 28 日に改めて掲載された上掲の指を見せている写真の解説では，「其筋に於て秘密に附し未だ世に発表されざるもの」とされている。この 2 枚の写真は，ハルビンの日本領事館で同じ時に撮られていたものかと思われる。いずれにせよ，安重根のこの 2 枚の写真は，政府機関や捜査当局から新聞社などの外部に 11 月中に流出していた。

切断された左手の薬指については，共犯関係の解明の観点から統監府でも強い関心を持っていた。1909 年 11 月 27 日，旅順監獄での統監府境警視の尋問に対する安重根の供述が次のように記録されている。

> 十三.断指ノ目的ハ大韓国ノ独立ヲ計ル為メニシテ、独立スルマテハ、如何ナル方法手段ヲモ撰ハス敢行スル考ナリ断指シタルハ昨年十二月カ今年正月カト思フ「ハリ」金姓方前述ノ宿屋ニテ切断セリ
> 断指ノ当時ハ民心散乱シ又自分ヲ信スルモノナキヨリ自分ハ国家ノ為メ盡ス熱心ヲ他人ニ示シ民心ヲ収ムルタメ断指シタルモノナリ

故ニ伊藤ヲ殺スノミノ目的ニアラス渠ハ日本皇帝ヲモ欺キ政策ノ誤レルヲ社会ニ公布シ之ヲ破壊セントスルモノアリ此ノ目的ヨリ出テタル結果伊藤ヲ殺シタルナリ[15]

日本では，江戸時代から「指切りげんまん」などとあるように，固い約束の証しとして，また改心を示すために指を落とすという行為があった。しかし，遊女や渡世人などの尋常ではない行為，特殊な集団内での行為とされていた[16]。そうしたこともあって，「指を落とす」ことが，日本社会でも強い好奇の目で見られていたことは事実であろう。

朝鮮社会では，「断指」が親や近親者の病を治すための行為としてあったことが『朝鮮王朝実録』に記されており，断指を行ったものが顕彰された例もあった[17]。しかし，「暗殺の盟約として」指を切る「旧慣」があった事実は確認されていない。ただ，安重根自身は，日本の侵略に対抗して独立を求める固い決意の証しだとしているのである。

安重根の写真絵葉書

『大阪毎日新聞』に掲載された安重根の二枚の写真は，両方とも絵葉書になったものが現存している。

一つは，韓国で個人が所有している絵葉書（**図7**：絵葉書1とする）で，2015年3月末から6月初旬まで，大韓民国歴史博物館で開かれた「光復70周年特別展　響き，安重根に出会う（울림，안중근을 만나다）」で展示されたものである。写真は『大阪毎日新聞』が1909年11月28日に掲載した切断した薬指を見せるポーズの写真を使っている。写真面下部に，

伊藤公を暗殺せし安重根

韓人は古来より暗殺の盟約として無名指を切断するの旧慣ある右手（ママ）を撮影せしものなり

とキャプションが付けられている。

1910年当時の絵葉書は，写真面に文字を書き込むことが多かった。1906年までは絵葉書のおもて面には住所と宛名しか書けず，通信文は写真部分に書くことになっていた。1907年以降はおもて面の下1/3に通信文を書くことができるようになったが，写真面にも文を書くことが多く，絵葉書は写真面に字を書けるように背景部分が消去されていた。この絵葉書も背景が消されている。おもて面には，

図7　絵葉書1

図 8　絵葉書 2

郵便はがき（右から）
Union Postale Universelle CARTE POSTALE

の記載がある。アルファベット部分は 1908 年に制定された国際基準に準拠しているという意味の「万国郵便連合 葉書」の表記で，この時期のほとんどの絵葉書にはこの文字が印刷されている。

もう一つの絵葉書は，佐賀県立名護屋城博物館が所蔵しているもの（**図 8**：絵葉書 2 とする）である。写真は，『大阪毎日新聞』が 1909 年 11 月 10 日に掲載した写真の元写真が使われている。これも背景部分が消去処理されている。写真面下部に，

（伊藤公暗殺者）（安重根）

と書かれており，おもて面の記載は

郵便はがき（右から）
CARTE POSTALE Union Postale Universelle
京城岩田寫眞舘製版部印刷（右から）

と印刷されている。通信文が書ける 1/3 のところに区切り線が入れられている。

絵葉書 2 については，おもて面に「京城岩田寫眞舘製版部」と製作者がわかる表記がある。しかし，絵葉書 1 については，そうした表記がなく製作者は不明だが，デザインや配色から，京城岩田写真館の絵葉書 2 とは明らかに別系統のものである。

沖野岩三郎文庫に残っている絵葉書の写真（**図 9**）は，この絵葉書 1 の写真と同一のものである。

それに加えて，英文のキャプション「The cut off Ring-Finger of the left hand represents the oath of a regicide, according to the old custom of the Koreans」

図 9

は，絵葉書１の「韓人は古来より暗殺の盟約として無名指を切断するの旧慣」という日本語キャプションの記述内容と一致している。

すなわち，この絵葉書１と，沖野文庫の巻物の絵葉書，そして幸徳秋水が「見本」として大石誠之助に送ったとされる絵葉書は，密接なつながりを持っているものと推測される。

こうしたことから，絵葉書１に幸徳秋水が漢詩を書き込んで，サンフランシスコの岡繁樹宛に送った可能性も考えられる。この仮説について，安重根の処刑の経緯や，日米間の郵便事情を含む時間の流れなどを考慮しつつ検証してみたい。

絵葉書見本の製作

まず，安重根の裁判と処刑について時系列で整理しておく。

旅順の関東都督府地方法院で死刑判決が言い渡されたのが２月 14 日，そして２月 19 日に安重根が上訴しないとしたことで死刑が確定した。安重根の死刑確定は2月21日に日本の新聞で報じられた。旅順の監獄で安重根の死刑が執行されたのは３月 26 日である。

前述のように，湯河原に滞在していた幸徳秋水は5月26日付で大石誠之助宛にサンフランシスコで岡繁樹が作成した絵葉書見本を同封して書簡を送った。その書簡末尾には「安重根のは日本製のは発売禁止になった」とも書かれている。

安重根の死刑が執行されて１ヶ月以上過ぎた1910 年４月 29 日の『東京朝日新聞』に「刺客寫眞の發賣禁止」という記事が出ている。

> 府下上澁谷下廣尾町六山口金太郎は伊藤公を狙撃したる韓人安重根の肖像を繪葉書に印刷し盛んに賣却し居たるが一昨日其筋より發賣を禁止されたり

湯河原にいた幸徳秋水は,「日本製の」安重根の絵葉書が販売されていたことを承知していて，この４月 29 日の記事を目にしてそれが発売禁止になったことを知り,「安重根のは日本製のは発売禁止」と書き送ったものと考えられる。すなわち，山口金太郎の作成・販売していた絵葉書が絵葉書１で，幸徳秋水はこれを入手したことがあるとの推測が成り立つ。

もう一つ,絵葉書１の安重根の写真が 2〜3 月に東京市内で使われたと思われる事例がある。

1910 年４月１日発行の『新韓自由鐘』第３号という雑誌の資料が残っている。ただし，残っているのは，雑誌の実物ではなく，情報収集のために東京で入手した『新韓自由鐘』第３号を大韓帝国内部警務局で日本語訳して筆写したものである。この『新韓自由鐘』は，当時東京に留学していた朝鮮人学生の結社「少年会」が出していた回覧雑誌で，明治学院普通部に通っていた李光洙が１・２号の編集を担当していた。李光洙は 1910 年の３月に明治学院を卒業しており，３号は他のメンバーが引き継いで出したと思われる[18]。

この第３号に「獄中ニ在ル安重根氏」として安重根の姿が描かれている（**図 10**）。

これは，上述のように大韓帝国内部警務局で日本語に訳した時に筆写したものであり，画像も原画の模写である。回覧誌では写真を転載することはできないので，スケッチか写真が貼られていたと考えられる。絵葉書の写真部分が貼られていた可能性もある。東京在住の朝鮮人留学生が安重根のこのポーズの絵葉書１を入手していた可能性がある。

すなわち，安重根の絵葉書１は，東京で 1910 年

図 10

の2月～3月には市販されていたものと考えられるのである。

幸徳秋水は，絵葉書1を購入して，安重根の死刑判決が確定したことが報じられた2月21日以降に，「舎生取義　殺身成仁」すなわち，「生を捨てて義をとり，身を殺して仁をなす」ことになった安重根への称賛の漢詩をその絵葉書の写真面に書き入れ，これをサンフランシスコの岡繁樹宛に投函したという想定に無理や矛盾はない。

当時，横浜からサンフランシスコまでは船で20日近くかかった。郵便物も船で運ばれるので，東京で投函した絵葉書がサンフランシスコの岡繁樹に届くまでに，20数日から1ヶ月弱はかかっていたことになる。

実は，幸徳秋水の漢詩の書かれた絵葉書が3月末にサンフランシスコにあったことが確認できる資料が残されている。

安重根が1910年3月26日に処刑されると，サンフランシスコ在住の朝鮮人団体「国民会」が発刊していた週刊新聞『新韓民報』は，1910年3月30日付の紙面に安重根の追悼記事を掲載した。そしてそこには，幸徳秋水の漢詩の入った絵葉書の写真が掲載されていた（**図11**）[19]。

この事実から逆算すると，幸徳秋水は東京で絵葉書1を入手し，それに漢詩を書き込んでサンフランシスコの岡繁樹あてに2月中旬，遅くとも2月下旬には投函したということになるのである。

『新韓民報』の編集発行人だった崔正益などと岡繁樹とのつながりは確認できない。しかし，3月末の時点でこの幸徳秋水の漢詩が書かれた安重根の写真は岡繁樹の手元にしかなかったわけで，『新韓民報』に掲載された写真はサンフランシスコ平民社の岡繁樹が提供したものということになる。

ところで，幸徳秋水は，3月22日に湯河原の天野屋旅館に菅野スガと共に投宿した。『通俗日本戦国史』の執筆のためである。投宿後に，サンフランシスコの岡繁樹に送った絵葉書が残っている。

其後は御無沙汰申譯ありません。小生も相変らず非常の逆境にて、東西放浪漸く昨今當所に落付きました、幸衛事昨年来一方ならぬ御厄介、深く感謝致します、今日は右御礼まで、その中ユツクリ書きます、矢野川からも詳細承りました、諸君へよろしく御伝声下さい、小生は今此処でチヨツトした著述をして居ります、出来ましたら送ります。

日本相州湯河原天野屋方にて　　幸徳秋水[20]

San Francisco Cal, March 30 1910, NO. 178

新韓民報

The New Korea

반고의 수안중근

図11

日付は書かれていないが，文面から3月末から4月初あたりに投函した葉書かと思われる。ここでは，漢詩を書き込んで送ったはずの安重根の絵葉書について何らの言及もない。つまり，幸徳秋水からは自分の送った絵葉書について何らかの依頼―例えばサンフランシスコでの絵葉書作成など―をしていたわけではなかったものと思われる。

岡繁樹は，幸徳秋水の漢詩の入った絵葉書を3月中旬頃に受け取ると，その写真を『新韓民報』に提供するとともに，幸徳秋水の漢詩と安重根の写真を複製したものに，日本語キャプションを英訳してそれに幸徳秋水を紹介する英文を加え，自分の経営する金門印刷所で絵葉書を作成したのであろう。4月の後半に，幸徳秋水が湯河原天野屋から送った絵葉書を受け取って幸徳秋水の居所がわかった岡繁樹は，自ら作成した絵葉書を「見本」として天野屋の幸徳秋水宛に送った。

幸徳秋水がそれを受け取れるのは5月20日前後である。その一枚を5月26日に和歌山新宮の大石誠之助に書簡とともに送った。

大石誠之助は，オレゴン州立大学の医学部を卒業し，モントリオール大学やインドのムンバイ大学への留学経験もある英語圏に足掛かりがある人物であった。サンフランシスコの岡繁樹から送られてきた英文キャプション入りの安重根の絵葉書の「見本」をどのように活用すべきか，大石誠之助のアイデアやアドバイスに幸徳秋水は期待したのかもしれない。

この時点で，「見本」は幸徳秋水の手元に一枚，大石の手元に一枚あったことになる。ところが，幸徳秋水が書簡に同封して送ったとする安重根の絵葉書は，大石誠之助の押収品リストには挙げられていない。

そして，その絵葉書は沖野岩三郎の巻物に表装されて今日に伝わっているのである。

沖野岩三郎による保管

当時，新宮で親しくしていた大石誠之助と沖野岩三郎とはしばしば会う機会があった。家宅捜索を受ける前日の6月2日も，沖野岩三郎は，来訪した明治学院の関係者と一緒に大石誠之助に会いに行っている。その時か，あるいはそれ以前に，大石誠之助が沖野岩三郎にこの絵葉書「見本」を手渡した可能性が考えられる。3日早朝から，沖野岩三郎の自宅も徹底した捜索が行われ，長時間にわたって取り調べも行なわれた。しかし，沖野岩三郎は逮捕を免れた。裁判にかけられることがなかったため沖野岩三郎については押収品リストは存在しない。そのため，どのようなものが沖野岩三郎の手元にあったのかはわからない。

今でこそ，幸徳秋水が安重根を称賛する漢詩を書いた絵葉書が出てきたら大変なことになる，見逃されるわけがないと思われがちだが，幸徳秋水が所持していた安重根の絵葉書は大逆事件との関わりで問題にされることはなかった。押収品のリストでは安重根の肖像のところは省略されている。重要視されなかったからであろう。また，裁判でもこの絵葉書が取り上げられることはなかった。

安重根の絵葉書は，4月末になって製造・販売が禁じられたが，所持が禁じられていたわけではない。6月3日に家宅捜索に当たった警察官が気付かなかったのかもしれないし，気づいたとしても押収されたり没収されることはなかったのかもしれない。

安重根の絵葉書は，東京だけではなく統監府の強い干渉下に置かれていた大韓帝国の首都京城でも，1910年の春，公然と京城の街頭に展示されていたという証言がある。

1926年に昌慶宮の前で日本人3人を乗せた車が刃物を持った男に襲われ一人が死亡，もう一人が重傷を負うという事件が起きた。4月25日，大韓帝国最後の皇帝であった純宗（李坧）が亡くなり，その弔問に出向いた日本人が朝鮮総督斉藤実と誤認されて襲撃された事件である。襲ったのは，29歳の宋学先（ソンハクソン）で，この事件は「金虎門（クモムン）事件」と呼ばれている。事件の翌日の1926年4月29日付で宋学先の供述調書が所轄の鍾路警察署から京城地方法院検事正あてに送られている。その中で，宋学先は，

幼時本町絵葉書書店に於て陳列しありし伊藤公暗殺犯人安重根の写真に対し鮮人等の賞賛し居りたるを思い出し[21]

と述べたとある。裁判の中でも幼かった頃に安重根の写真を見たことを述べている[22]。

京城の本町には，本町2丁目の角に日之出商行という絵葉書や額縁を専門に扱う店があった。1906年の創業で，自社で絵葉書の製造・販売をするとともに内地の各種絵葉書も取り扱っており，店頭で絵葉書を展示していた。宋学先の陳述によれば，1910年，本町日之出商行の店頭に安重根の絵葉書が展示されていて，それを朝鮮人が賞賛しながら見ていた。12〜3歳の宋学先もその場に居合わせ安重根に憧憬の念を抱くようになったという。

安重根が処刑された3月26日以降，安重根の絵葉書を京城で発売しようとした日本人写真館が発売を禁止された。1910年3月29日付の朝鮮語の日刊紙『大韓每日申報』は，「安眞發售」との見出しの記事で「日本人の写真業者が安重根氏の写真を複写して内外国人に販売するという」内容を伝えている。ところが2日後の3月31日付には，

安眞發賣禁止
日本人の岩田・菊田写真館などが安重根氏の写真を複写販売するというのはすでに報道したところであるが、内部（内務省）ではこれを、治安を妨害するものとして4日前に発売を禁止したという

という記事が掲載されている。この記事内容が正しいとすれば，京城で岩田写真館や菊田写真館が安重根の写真を販売しようとしてそれが禁ぜられるのは1910年3月末で，それ以前に京城の本町の街頭に安重根の写真（絵葉書）が展示されていたということになる。

この岩田写真館とは，絵葉書2にある「京城岩田寫眞舘製版部」である。この当時は，店主の岩田鼎は南大門通に店舗を構えていた。絵葉書2がこの時に販売が禁じられたものである可能性は高い。宋学先が言った「本町絵葉書書店に於て陳列」されていたのは，場所や製作の時期からいって絵葉書2ではなかろう。むしろ，未使用の絵葉書1が現在韓国国内に残されていることを考え合わせると，東京で2月には販売されていた絵葉書1を日之出商行が仕入れて店頭に置いていたとみることができる。

併合前のこの時期も，併合後も，朝鮮と内地では様々な対応が異なっていた。併合直前の韓国の京城と東京とでは，安重根の絵葉書の取扱にも明らかな違いがあった。東京では，安重根の絵葉書が特に規制されることもなく4月末までは販売されていた。さらに，東京で作られた安重根の絵葉書は，京城でも一番のメインストリートである本町通の絵葉書専門店の店頭に置かれていた時期もあったのである。

おわりに

幸徳秋水は，東京で安重根の絵葉書1を入手し，それに安重根を讃える漢詩を書き込んでサンフランシスコの岡繁樹に宛てて投函した。それを受け取った岡繁樹は，幸徳秋水の漢詩を添えた安重根の獄中写真を複写し，英文キャプション付きの絵葉書を作って，それを「見本」として湯河原天野屋に滞在する幸徳秋水のもとに送った。

それは，ちょうど安重根が旅順の監獄で処刑される時期と重なり，当局によって大逆事件がフレームアップされていく時期ともたまたま重なっていた。

絵葉書1の販売は禁止されたものの，沖野岩三郎が大石誠之助から預かった幸徳秋水の漢詩が描かれたサンフランシスコ製の絵葉書見本は，押収されることもなく沖野岩三郎によって保管され，日本の敗戦の後，大逆事件の関係資料の一つとして表装されて明治学院に寄贈されたのである。

沖野岩三郎は1922年5月に朝鮮と満洲(中国東北部)の旅行に出ている。5月9日に釜山に上陸し，馬山・鎮海・慶州・群山・木浦・全州・清州・忠州と回って京城へ，そして仁川・開城に立ち寄って，今度は京城から元山・咸興・京城・平壌・義州へ，そして安東・奉天・撫順・大連・旅順と巡っ

ている。この旅について，沖野岩三郎は翌年『薄氷を踏みて』[23] を出版して朝鮮や中国東北部での体験を書き記している。朝鮮人に対する日本人の横柄で差別的な態度への批判が随所に垣間見られ，3・1 独立運動にも強い関心を示している。しかし，満洲に入り，最後は旅順に立ち寄っているが，この地で裁判を受け，そして処刑された安重根への言及は全くない。旅順での関心はもっぱら自身が非戦論を唱えた日露戦争について向けられている。

沖野岩三郎が安重根の絵葉書を保存し続けたのは，幸徳秋水と大石誠之助への追憶と追悼の意味からで，大逆事件に関わる記録として書簡類の巻物の第 6 巻に表装されたものであろう。

しかし，その一方で，この絵葉書が今日まで保存されたことによって，日本と朝鮮半島との関係を，「日本対朝鮮」「日本対韓国」という国家レベルでの対立構造として見るのではなく，国家権力を振りかざす者・侵略を行わんとする者と，それに抗う人々という構図の中でこの絵葉書が作られ，今日まで伝えられている事実に我々が学ぶべきことは多いのである。

注

(1)　神崎清『この暗黒裁判（革命伝説 3）』芳賀書店 1967。詳しい経緯は本文中で後述する。

(2)　ユンビョンソク（윤병석）「安重根の写真（안중근의 사진）」『韓国独立運動史研究（한국독립운동사연구）』37　2010
都珍淳「韓国の安重根と日本の知識人たちの平和論比較―“和して同ぜず”“似て非なるもの”千葉十七・幸徳秋水・徳富蘆花・石川啄木・夏目漱石」『2017 年第 4 回国際学術会議・龍谷大学所蔵安重根遺墨等関係資料展示予稿集 東アジア地域の平和を見つめなおすための歴史認識』2017

(3)　SBS『朝鮮独立の隠れた主役　日本人独立闘士たち』2011 年 8 月 15 日放送，MBC『安重根義挙 105 年　終わらない戦争』2014 年 8 月 13 日放送

(4)　野口存彌『沖野岩三郎』踏青社 1989

(5)　明治学院大学図書館『沖野岩三郎文庫目録』1982 年

(6)　この鉛筆で書かれた数字は，巻物に表装された他の書簡や葉書にも書き込まれており，表装に出すときに順序の覚えとして書き込まれた番号であろう。ただ，表装されたものをみてみると全てが番号通りに並んでいるわけではない。

(7)　大逆事件記録刊行会『証拠物写』1964　はしがき

(8)　神崎清前掲書 170 頁

(9)　神崎清前掲書 168 頁

(10)　荒畑寒村『寒村自伝』上巻　岩波文庫 1975 194 頁

(11)　加藤哲郎「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の 1936 年来日と偽装転向」『インテリジェンス』第 4 号（2004 年 5 月）

(12)　幸徳秋水を顕彰する会『秋水通信』第 23 号（2017 年 12 月）

(13)　沖野岩三郎『私は生きてゐる』大阪屋号商店 1925

(14)　野口存彌『沖野岩三郎』踏青社 1989

(15)　韓国国史編纂委員会『統監府文書』第 7 巻　文書番号 271　旅順監獄での安重根陳述内容

(16)　三田村鳶魚『娯楽の江戸』恵風館 1925

(17)　『顕宗改修実録』顕宗 11 年 5 月 13 日条「重普又陳定平甲士朴大有文川鄕吏全茂績斷指活其父母宜蒙褒奬上曰令該曹特行旌表（洪重普がまた奏して「定平甲士朴大有と文川鄕吏全茂績が断指してその父母を助けたので、褒賞して奨励すべし」と。国王曰く「担当部署をして特に善行を称え世に広く示すべし」と。）」

(18)　佐藤飛文解説『明治学院歴史資料館資料集』第 8 集 2011

(19)　『新韓民報』1910 年 3 月 30 日付紙面は，現在ソウルの安重根記念館に展示されている。

(20)　幸徳秋水全集編集委員会『幸徳秋水全集』第 9 巻 1982　515 頁。絵葉書は岡繁樹の遺族が高知文学館に寄贈した中に残されている。

(21)　韓国国史編纂委員会データベース「国内抗日運動資料　京城地方法院検事局文書　検察事務に関する記録 3」京鍾警高秘第 4769 号 吊侯者殺害に関する件

(22)　『時代日報』1926 年 7 月 16 日付「平素から安重根を崇拝」

(23)　沖野岩三郎『薄氷を踏みて』大阪屋号書店 1923